

論文審査の結果の要旨

Post-traumatic stress symptoms and burnout among medical rescue workers 4 years after the great east Japan earthquake: a longitudinal study

東日本大震災時に活動した DMAT 隊員の 4 年後の精神健康に関する縦断調査

日本医科大学大学院医学研究科 内科系精神・行動医学分野

大学院生 河嶌 讓

Disaster Medicine and Public Health Preparedness 2016 掲載予定

東日本大震災は約 18470 人が亡くなる大惨事であった。このような惨事の後には、被災者だけでなく救援隊員も精神的ストレスを受けることが知られている。しかしながら、救援活動直後から長期にわたって救援隊員の精神健康を縦断的に調査した報告はない。震災後 4 年を経過した時点における DMAT 隊員の精神的ストレスを縦断的に調べることは、救援者の精神健康対策を検討する上で重要と思われる。

申請者らは、東日本大震災で救援活動に従事し、研究者らの先行研究に参加した災害派遣医療チーム (Disaster Medical Assistance Team:DMAT) 隊員を対象に、被災から 4 年後の外傷後ストレス障害 (PTSD) および燃え尽き症候群 (burnout) の予測因子を検討した。方法は、日本 DMAT 事務局のメーリングリストを利用し、初回の調査参加者に質問紙への回答を依頼した。直後の精神的苦痛は、精神的苦痛の包括的評価法 (Peritraumatic Distress Inventory : PDI) で評価した。4 年後の PTSD 症状は改訂出来事インパクト尺度日本語版 (Impact of Event Scale revised : IES-R)、燃え尽き症候群は Maslach Burnout Inventory (MBI) で評価した。救援活動に従事した DMAT 隊員 1816 名中 254 名が参加し 188 名 (回収率 74%) から回答を得て、IES-R および MBI の得点を従属変数、PDI の得点を独立変数、初回調査で調べたそのほかの要因を調整変数として重回帰分析を行った。その結果、救援活動直後の精神的苦痛 PDI 得点は 4 年後の IES-R および MBI を統計的に有意に予測し、派遣前ストレスは 4 年後の MBI を予測することを明らかにした。

本研究は、派遣前ストレスや活動直後の精神的苦痛の評価が、救援者の精神健康増進や離職・休職の予防に繋がることを明らかにした。本研究の結果も踏まえ、2015 年 9 月に発生した茨城県を主とする豪雨災害以降、支援活動を行った DMAT 隊員に対し、本研究で使用した質問紙を用いた継続的なフォローが開始された。

学位論文第二次審査においては、データ収集、統計解析など方法論の問題から、直後の精神的な苦痛と 4 年後の精神健康との関連、さらには今後の DMAT 隊員の精神保健の在り方などについて、多岐にわたる質疑が行われ、いずれに対しても適切な回答が得られた。

以上から、学位論文として価値あるものと認定した。